

田岡俊次の 国際情勢の 行間を抉る

⑧



果たして「第2次朝鮮戦争」は 起きるのか

北朝鮮は3月6日、秋田と能登半島沖の日本海に「スカッドER」（射程約1000km）と見られる弾道ミサイル4発を一斉発射した。昨年9月5日にも北海道の奥尻島沖に同じミサイル3発をほぼ同時に発射している。開発段階の試射なら1発ずつ発射して改良のためデータを取るのが普通だから、一斉発射はすでに開発が完了し、実戦配備についたことを誇示する目的と考えられる。

核弾頭も「標準化」に成功した、と昨年9月9日の核実験後に発表し、量産に進む気配を見せる。長射程弾道ミサイル用の大型ロケット・エンジンの燃焼実験を3月18日に行ない、即時発射が可能な固体燃料の弾道ミサイルの発射実験も2月12日に成功している。

北朝鮮の核と弾道ミサイルの開発、配備が急速に進む中、3月1日〜4月下旬の米韓軍の合同軍事演習「フォウル・イーグル」に米軍の原子力空母「カール・ヴィンソン」やグアムからのB-1B戦略爆撃機、1月から岩国基地にまです10機配備されたF-35Bステルス戦闘攻撃機も参加、オサマ・ビン

ラディンを殺害した「ネービー・シールズ」第6班や陸軍の特殊部隊「デルタフォース」も出動した。韓国軍は今年12月までに、北朝鮮首脳部を狙う「特殊任務部隊（約1000名）を編成する予定だ。

米軍、韓国軍が北朝鮮の核、ミサイル能力や指揮中枢を一举に壊滅させる作戦に出るのでは、との報道が日本にも少なくない。その可能性はどの程度か、田岡氏の見立てを聞いてみた。（聞き手・本誌編集長／和泉貴志）

「死者100万人」と弾き出された核施設攻撃

Q…トランプ政権は発足後2カ月たっても政治任用の省庁幹部約2000人の任命がごく一部しか進まず、政府は停滞状態で支持率も株価も急落。さらにFBIは大統領選挙でクリントン候補の信頼失墜を図ったロシアのサイバー工作に関わっていたトランプ陣営の捜査を進めています。その窮状を打開するために軍事行動に打って出る可能性もあるか、と考えますが。田岡…確かにその誘惑はあるでしょう。トランプ陣営には、この20年以



3月6日秋田と能登半島沖に向けて北朝鮮が発射した4発の弾道弾

上米国の歴代政権は北朝鮮の核、ミサイル開発に無為無策だった」とし、「一撃を加えるべき」と唱える強硬派もいる。だが、そのリスクは余りにも大きいから軍は同意しないのではと考えます。

実は米軍は1994年にも北朝鮮の核施設に対し、「外科手術的攻撃」(サージカル・ストライクス)を行なう準備をしたことがある。当時、ソ連が1990年に韓国を承認して国交を樹立し、中国も1992年にそれに続いたから、見捨てられた北朝鮮は核開発を始め、1992年3月にNPT(核不拡散条約)脱退を

宣言、6月に脱退は留保したものの、査察に全面的な協力をしないため1994年3月に査察官は引き揚げ、国連による制裁が論じられ緊張が高まっていました。

ブッシュ(父)政権からクリントン政権移行後のワシントンでは、「核施設を航空攻撃で破壊すべきだ」との声が高く、米軍も命令がもし出た場合に備えて攻撃準備を始めました。北朝鮮北部の寧辺(ヨンピョン)の原子炉や使用済み核燃料棒からプルトニウム抽出する再処理施設を航空攻撃で破壊すること自体は容易です。空からまる見えですから。

だが、北朝鮮軍はソウル北方約40kmの南北境界線付近に強固な地下陣地を築いている。朝鮮半島を横断する全長230km、縦深(奥行き)約30kmの主要塞です。これは朝鮮戦争中に中国軍が築き、米軍の猛烈な砲撃、爆撃に耐えて戦線を守り抜いた。そこに北朝鮮軍は22連装の240mm自走ロケット砲(推定射程60km)などロケット砲約2500門、170mm長距離砲(同40km)などを配備し、ソウルを射程内に入れていた。核施設を航空攻撃すれば北朝鮮は反撃し「ソウルを火の海にする」と公言

していた。これを防ぐには米韓軍は核施設の攻撃前にまず停戦ラインの北にある陣地地帯を制圧する必要がある。「第2次朝鮮戦争」になる形勢でした。

その場合、在韓米軍の損害見積りは「最初の90日間で米軍の死傷5万2000人、韓国軍の死傷49万人、民間人を含む死者100万人」と出た。この報告は全面的地上戦になることを考えず、航空攻撃だけを論じていたワシントンの政治家、高官らの頭に冷や水を浴びせました。

クリントン大統領はカーター元大統領と打ち合わせ、カーター氏は「民間人」として平壤に飛び金日成主席と6月16日に会談、北朝鮮の核開発凍結、査察官の再派遣、その見返りに兵器用の純度の高いプルトニウムの製造に使いにくい「軽水炉」を提供、国連制裁を米国は提案しない、などで合意し1994年の危機は回避されました。

当時の在韓米司令官ゲリー・ラック陸軍大将には、彼の退官後ワシントン郊外のホテルで会い、約2時間話を聞いたが、機密に触れない巧みな表現、例えば損害見積りについて、「私の旧友、ワシントン・ポストのド

ン・オーバードルファー氏はこれこれの数字を書いているが、それは正しいのですか」と聞くと、「私も彼をよく知っています。立派な記者で尊敬しています」と間接話法で肯定するなど、当時の経緯を丁寧に述べられたのには感服しました。軍人の方がシベリアンよりも現実的に考えざるを得ないだけに、優秀な将校は戦争に慎重であった例は少なくないのです。

2003年に「イラク攻撃をするなら数十万人の兵力を数年間投入する必要があります」と米上院で答弁して主戦論のラムスフェルド国防長官と対立、事実上解任された陸軍参謀総長エリック・シンセキ大将(日



「フォール・イーグル」に参加する米空母(米海軍)



「フォウル・イーグル」には米海軍特殊部隊シールズも参加(米海軍)

系人)、1979年のソ連のアフガニスタン介入に反対しウスチノフ国防相と対立した、ソ連軍総司令官、V・オガルコフ元帥もその例です。

偵察衛星や無人飛行機での弾道弾監視は現実的に無理

Q: 1994年当時でも、北朝鮮への「外科手術的攻撃」はリスクが大きかったのであれば、核弾頭も弾道ミサイルもできてしまった今日、攻撃はさらに難しいのでは。田岡: そのとおりです、原子炉などは大型で位置が分かっている固定目

標だが、核弾頭はどこにでも隠せる。「この辺りに核の貯蔵庫があるらしい」との情報もなくはないが、本当かどうか怪しい。詳細な位置は分からない。全長30m、90tもある「テポドン2」が発射される日本海岸の舞水端(ムスタン)と、黄海岸の東倉里(トンチャンリ)には巨大な固定発射台があるが、あれは人工衛星を打ち上げるための宇宙センターです。まる見えの塔の側で2週間もかけて組み立てて発射する物は、簡単に破壊されるから軍用ミサイルには向かない。テポドン2は2012年12月と2016年2月の2回、人工衛星の打ち上げに成功し、衛星は軌道に乗ったが故障したようで、電波は出ていませんがね。弾道ミサイルは移動式発射台に載せてトンネルに隠したり、サイロ(立て坑)に入れるため、なるべく小型で発射準備時間が短い物にしたりする必要がありません。「スカッドER」で長さ約12m、6t級、旧式の「スカッド」(射程約130km)は12m、16t級、新型の「ムスタン」(同3000km以上)は12.5m、12t級、と見られます。

先制攻撃を唱える人は偵察衛星で弾道ミサイルを発見できると思っていることが多い。だが、偵察衛星は約90分で地球を南北方向に周回し、地球は東西方向に自転する。だが世界各地の上空を1日約1回通るが、時速約2万8000kmで一瞬に通過するから、飛行場、宇宙センターなど固定目標は撮影できても、移動する物体の監視はできません。遠心力で浮いているから1地点上空に留まれば墜落です。静止衛星は赤道上空を約3万6000kmの高度で周回するから、この高さだと地球の自転速度と釣り合って静止しているように見える。だが地球の直径の2・8倍もの距離だからミサイルなどは見えない。発射台に出る大量の赤外線(熱)を感じることができる。

無人偵察機「グローバルホーク」はジブトエンジンつきのグライダーで、高度2万5千近くを35時間飛行できるから、これを多数使って北朝鮮上空で常に巡回させておけば、自走発射機がトンネルから出てミサイルを立てる光景を撮影できるでしょう。だが、開戦前にやれば領空侵犯だし、低速だから北朝鮮のソ連製の旧式対空ミサイル「SA2」(射高約2万5000km)でも簡単に撃墜される。公海上だけ飛行させれば主として北朝鮮北部の山岳地帯に隠されているミサイルは発見できません。

隠されている物体を空から探すのは難しい。1991年の湾岸戦争では米軍はイラク上空で完全な制空権を持ち、イラク軍の弾道ミサイルを破壊するための「スカッド・ハント」に連日平均60機を出撃させ、上空で待機、搜索させたが、ミサイル発射を知って駆け付けて発射機を壊すのが精々で、それを「成功」と発表していました。ミサイルを発射前に破壊したのはただ1件。夜間に特殊部隊を運んでいたヘリがすぐ近くで発射の炎を見てそちらへ向かったところ、もう1基のミサイルが発射準備をしているのを発見、銃撃で処理、という全くの偶然の結果でした。

日本でも、「敵基地攻撃能力」の保有が論じられるが、攻撃能力以前に目標をどうして見つけるかが問題です。平時の対地攻撃の訓練では目標は射撃場内の決まった場所にあり、はつきり見えるから、つい目標探知の難しさを忘れがちで、これも「平和ボケ」の一症状でしょう。しかも攻撃するなら相手の弾道ミサイルを総て、ほぼ同時に破壊しないと核ミサイルによる反撃を受ける公

算大だが、これは至難の業です。

「軍事演習に特殊部隊も参加」と喧伝する本当の意味

Q：特殊部隊を潜入させ、政府首脳部を襲うとか、指揮系統を麻痺させる作戦も語られるが、実行の可能性はありますか。

田岡：これは映画じみた発想です。要人の所在を知るのには難しい。オサマ・ビン・ラディンの殺害は米英軍が2011年10月にアフガニスタンに侵攻して約10年後の2011年5月。サ



米空軍のF-15E戦闘攻撃機から投下されたバンカーバスター(米空軍)

ダム・フセインの捕捉は2003年3月のイラク進攻、占領から9カ月後の同年12月でした。1997年のコン

ボ紛争、ユーゴスラビア爆撃の際には米軍はソロボダン・ミロシエビッチ大統領を殺そうとし、大統領が出演するテレビ局を精密誘導爆弾で攻撃した。だが番組の時間が変更されていてテレビ局のスタッフを殺しただけでした。私もその翌日でしたが、テレビ局を訪れ、スタジオを直撃した命中精度には感心したが、情報が違つてはどうしようもない。ベオグラードの中国大使館を軍の施設と間違え、爆撃したのもこの時で、これも見事に命中、米軍は攻撃能力、技術だけが高かった。

地下約30m、鉄筋コンクリートなら6mを貫通する地中貫通爆弾「バンカーバスター」で地下の政府中枢や軍の司令部、通信拠点などを破壊するとしても、相手もそれを予期して別の場所に移つていることもある。指揮、通信が一時混乱しても、やがて復旧すればミサイル発射をするでしょうし、前線のロケット砲、長距離砲部隊は総司令部との連絡が切断されても事前の指示で、新型の10連装300mmロケット(射程150km)

を含むロケット砲や重砲で、ソウルや軍の基地を火の海にする可能性があります。

先制攻撃や「斬首作戦」は成功の確率が低い上、第2次朝鮮戦争、最悪の場合は核戦争に発展するリスクが高い。韓国、北朝鮮双方に途方もない被害をもたらすだけではありません。北朝鮮は3月6日の弾道ミサイル4発の発射後、「有事の際に在日米軍基地を攻撃する訓練だった」と発表しました。日本では衝撃を受けた人も多いのだが、もし戦争になれば、自国にとり危険の大きい軍事施設や部隊をまず叩くのは定石で、特に驚くに当たりません。韓国内の米軍、韓国軍の航空基地、指揮中枢の他、米空母がいる横須賀や有事に米空軍の「航空宇宙遠征隊」(約100機余)が米本土から飛来するはずの嘉手納、三沢、米軍の上陸作戦を警戒すれば、揚陸艦4隻がいる佐世保や岩国の海兵隊航空基地も狙うのではないかと考えます。

米韓軍が先制攻撃、斬首作戦を本当にやる気なら、その企図を極秘にして準備、訓練を進め、相手が対抗手段を取らないようにするはず。特殊部隊の演習の模様を公開した

り、先制攻撃の能力を誇示するのは実行する気が少なくとも当面はなく、北朝鮮を威嚇し、核・ミサイル開発に歯止めをかける一助にしたいとか、日本、韓国に米国の軍事力に対する信頼感を与え、独自の抑止力保有に向かわせない狙いと見るのが自然でしょう。

ただ少々脅してみただけでは、北朝鮮が核、ミサイルを廃棄あるいは開発を凍結する公算は無に等しい。交渉との組み合わせが必要です。トランプ大統領は選挙中に金正恩労働委員長と直接会談する意向も示したが、これは例の「口から出まかせ」か、本気なのか分かりません。米國が中国に対し、北朝鮮への圧力の強化を求めても、中国は北朝鮮が崩壊の淵に立つて自暴自棄の行動に走ることを防ぐ「生かさず殺さず」政策を大きく変えるとは思えません。この中国の政策は穏当だが、問題を先送りしていた間に北朝鮮は核、ミサイル開発を進め、今日の状況に至ったのだから成功とは言えません。だがそれ以外にどんな手があるのか、誰にも分からないまま事態が悪化している状況です。